

2011年7月25日

埼玉県秩父における取材事故 調査報告

1. 事故の概要

2010年7月31日、埼玉県秩父市の山中で防災ヘリ墜落取材に向かった当社報道局映像取材部デスクの川上順カメラマンと社会部の北優路記者の2人が行方不明となった。翌日午前9時過ぎ、登山道から外れた沢の滝つぼの岸で見つかったが、病院で死亡が確認された。警察の司法解剖で死因は溺死と判明した。

2. 調査結果の概要

事故後、本件取材の決定と実施に関わったすべての関係者からのヒアリングや、同行したガイドを伴った現地調査などを行った。しかし、事故の目撃はなく、事故に至る過程では本社と現場との間で連絡が取れておらず、警察の捜索でも、撮影に使ったとみられるカメラ本体が見つからず、事故原因の特定には至らなかった。警察の調査でも未解明である。調査検証の過程で判明したのは以下の通りである。

○装備について

警察から返却された装備によれば、北記者が着ていたジャージ、Tシャツはいずれもガイドから事前に指導された通りの「速乾性」であり、夏の沢登りで問題があるとは考えられない。北記者はリュックの中に雨具上下を入れていたが、ガイドはこの事実を知らなかった。また、ガイドは北記者のために防寒着としてフリースも携行しており、夏の山岳装備として十分であったと考えられる。

○発見場所について

ヒアリング調査により、防災ヘリ墜落取材とは別に、ヘリ出動のきっかけとなった遭難事故の取材として“沢登りの危険性”を指摘する別の企画も、出発前日に検討されていたことがわかった。2人の発見場所は、ヘリ墜落現場までは、約2～3キロの距離がある。発見された現場の下流50メートル地点にはリュックが置かれていたのが発見されており、2人がさらに先に進もうとした形跡が見られない。また、ガイドの説明によれば、事故前に2人は同じ場所でガイドへのインタビューや、登山装備をつけるシーンなどのロケ取材を行っていたが、発見された近くにある滝の撮影はしていなかった。こうしたことから、2人は、当初予定していたヘリ墜落現場への取材計画を断念・変更して、“沢登りの危険性”の取材をしていた可能性が推察される。

3. 組織としての課題

今回の取材装備は、ガイドの指導の元、川上カメラマンが主導で準備をした。結果的に、装備は十分であったと考えられるものの、取材目的に照らした服装・装備について現場と本社が十分に話し合い、情報を共有すべきであった。また、取材目的は、防災ヘリ墜落事故現場に向かい、事故機をより接近して撮影することだったが、それとは別の“沢登りの危険性”の企画を検討していた事実が、報道局内で共有ができていなかった。さらに、今回の取材では、イリジウム衛星電話、災害優先携帯電話、日本テレビ業務無線機（VHF）を準備し、本社との連絡線確保に努めていたはずだったが、結果として出発以後は、本社に連絡はなかった。事前に詳細な連絡方法は決めておくべきであり、現場をサポートする本社の体制が万全ではなかった。

事故調査報告では、こうした組織としての課題を抽出したうえで、現在判明している事実関係を基に、報道局が可能な限りの事故防止策を検討し、今後の山岳取材、危険地取材などについて、徹底した安全管理を行なうことが必要である、と結論づけた。

4. 山岳事故防止のための取り組み

この事故を受けて、報道局では、取材者の安全を最優先に考えつつ、報道機関としての役割を果たすために、「山岳事故防止のための取り組み」を策定し、危険を伴う取材の指針として、「危険地取材のあり方」と「山岳取材ハンドブック」を明文化した。その上で、すべての取材スタッフに対して、山岳取材のあり方の周知を徹底するなど安全管理対策を強化している。

日本テレビ放送網株式会社 総務局 総合広報部